



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北星学園大学
Citation	高等継続教育研究, 3, 178-188
Issue Date	2004-03-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/51901
Type	other
File Information	Hokuseigakuen-3-21.pdf



9. 北星学園大学

日 時 2003 年 11 月 20 日 15:20~17:00

話し手 米本 秀仁 氏（北星学園大学社会福祉学部教授）

佐野 和真 氏（北星学園大学教務事務部長）

聞き手 姉崎・光本・石山・伊藤・稲田・上田敦・染木・藤田・村上・星



米本 秀仁 氏

建学理念と学園の運営

米本 こちらの大学で社会福祉学部で教務部長をやっています。質問をいただいたときに、だれが応えたらよいか、ひょっとしたら学長が応えたらと思ったわけですが、私の範囲でと考えました。この間いろいろあるかと思いますが、教務事務部長の佐野さんが詳しいので来ていただきました。

質問事項のほとんどは『大学案内』に出ていると思います。3 頁にあるように、始まりは 1887 年に札幌に開かれた小さな塾で、外国人教師のサラ・C・スミスによってつくられました。この人物は北大の農学部と深いつながりがあるといわれています。サラ・C・スミスはいわゆるミッションの人だったといわれていますが、それだけではなく、女子教育に関心をもっていました。当時まだ、北海道は必ずしも開発されていたわけではなく、啓蒙されていたわけでもないということで、女子教育の志をもち日本に渡ってきました。それ以来、北星学園大学は、いわゆるキリスト教主義学園・大学という言い方がされています。

それでは、キリスト教主義とはいったい何が内容としてあるのかということです。そこに「女性教育の祖」とか、「国境や人種を越えた人間教育」とか、いろいろ書いてありますが、キリスト教の精神に基づいてということがあるわけです。ではキリスト教精神とは一体何なのかというと、正面からなかなか

言い切れないところがあります。そこで、スミスが意図した理念、残した言葉は何なのかということの解明と、それをどのように受け継ぐかということ、実はいまやりはじめているところです。「キリスト教教育のあり方検討会」というものが発足しておりまして、いままでの本学のキリスト教主義の学校教育を見直して、いわゆる建学の理念をどのように構成できるか、そこからどのようなミッション（使命）が出てくるか、それにもとづいてどのような学校教育の体系ができるのか、というようなことを組み直している最中です。

これまでのところ、キリスト教の精神がどのように制度的に反映されているかということをお話したいと思います。

一つは、月曜日から金曜日まで毎日、お昼休みの時間ですが、12 時 5 分から 12 時 25 分まで 20 分間礼拝が行なわれています。こちらを出て右奥の方に、ちょっと隠れていますが、礼拝堂、チャペルがありまして、こちらは常に開かれていて、礼拝が行なわれている。礼拝があるということは、当然牧師がいます。大学つき牧師——チャプレンがおりまして、彼と宗教部がとり仕切っています。

大学の組織の中には宗教部という一つの部がありまして、宗教部長は大学の運営の一端を担っています。部局長会議の部局の一つとしての宗教部長が参画していて、大学の運営に宗教部の考え方、いわゆるキリスト教主義的な発想を生かそうというかたちで、運営の上層に位置しているといえます。

教育ということでどうなのかということですが、大学のカリキュラムの中に共通科目と学部の専門科目とがありますが、共通科目の方に「キリスト教文化科目」というのがあります。52 ページの「大学共通科目」の「総合文化科目」という群の中にキリスト教文化科目というのがあります。その中に「聖書の世界」Ⅰ・Ⅱ、「キリスト教の歴史」Ⅰ・Ⅱ、「キリスト教の文化」Ⅰ・Ⅱとあります。この 3 科目のうちからどれか一つ、Ⅰ・Ⅱとあるのは両方とらなければならない。単位でいうと 2 単位ずつですから

合計4単位ですが、これが選択必修になっているわけです。したがって、ここに入ってきた学生たちは、聖書・キリスト教という世界を、信仰的な意味ではありませんが、あくまでも学的な意味で、必修として通過していくことになります。

このように、制度的なところでは、キリスト教をどのように学生たちに触れさせていくかということをやってきました。その他、年間の学年暦の中に、キリスト教にかかわる行事とか儀礼といったものがあります。クリスマスの礼拝とか集会といったものです。もう一つ、入学式・卒業式は礼拝のかたちをとります。それから、教授会は必ずお祈りから始まるとか、そういうかたちで精神を反映させようとしています。ではクリスチャンは大学にどのくらいいるのだろうかといいますと、圧倒的に少数派です。

教養教育

米本 次に、教育課程はアメリカのリベラル・アーツ・カレッジを手本に構成されているかということですが、リベラル・アーツ・カレッジはどういうものだったかといいますと、こちらも分からないところがあります。どのように考えますか？

姉崎 アメリカでは、学部段階で人文型の教養をベースにして一種の全人教育を行い、専門教育は院の段階でやるという考え方が強く出ているので、学部・学士課程教育を比較的完成したかたちで行うのが一般的だと思いますが、日本の場合ですと、理系の方は比較的近いかたちはあるのですが、文系の場合は専門教育と教養教育というのが一緒になっていて、それを4年間の中で、履修していくとなると、組み合わせはあるのですが、どういうかたちで最終的な結実をするのかということが比較的曖昧になっています。そうしたことがありますので、卒業した時点でどのような人間像をもって教育目標をデザインされているのかということをおうかがいしたいと思っています。

米本 学部によって色彩が異なっていて、特色があります。経済学部ですと、経済学における専門性を学部段階でどの程度入れられるかについてはかなり懐疑的なところがあって、人文社会科学系的なところで比較的経済に特化したかたちのものになる、これが果たして専門教育かどうかということになると、おそらく自分たちで首をかしげる先生方がいるのだらうと思います。

ただ、どの学科も少なくともカリキュラム上は共

通科目と専門科目に分けますので、共通科目は教養、専門科目は専門教育、カリキュラム上の構成はそうになっているといえます。しかし、専門教育を考えると、どこで関係するかということを見ると、例えば英文学科ですと、英語のスペシャリストということで考えてきたときに、それは共通科目も専門科目もかなり一緒にしながら、英語に特化したかたちで4年間を経験させるわけです。英語のスペシャリストとして出てきて英語の教職につけるようなところにまで行くわけです。英語でいうと、TOEFL 何点がとれるとか、英検何級がとれるとかなど、そのような自分たちの教育結果が一定のクオリフィケーションと結びついてくる。それを専門教育と呼べるかどうかということはありませんけれども、そういうふうに、かなり目的を特化したかたちの授業の体系を組み立てることをやっているわけです。他のところは、いわゆる資格と結びついた教育を専門性と絡めながら行なうところがあります。社会福祉関係ですと、社会福祉士国家資格の受験資格をめざすとするならば、受験資格を得た後、当然国家試験に受かるようにということまで考えているわけです。かなり内容的には特化したものですから、内容的にはリベラル・アーツとはとてもいえないです。

そういうふうに、学科によってかなり違いがあって、どの学科も専門科目と共通科目の二分の中で、くさび型のカリキュラム体系をとるわけです。1年目からかなり自分たちの学科の専門性に触れさせながら進めていくということをやっています。そのような組み立てをしないと、学生は教養課程、共通科目の課程に飽きてしまう。そういうことが現にあるわけです。

入学してくる学生たちが問題意識が鮮明になっているかは別にいたしまして、少なくとも共通科目に触れるよりも、専門の科目にできるだけ早く触れたいし、かなり多く触れたいと思う気持ちがあって、それが自分たちのアイデンティティをつくっていくことと関連するわけですので、そういう意味では、リベラル・アーツ型とはなかなかいえないと思います。

姉崎 土橋さんがICUを出られたりして、各分野に強いということと同時にそれらを総合するということをおっしゃっているものですから。

米本 大学の理念としてそのような考え方を比較的上層部の人がもつということはあるうと思います。しかし、それが学科まで降りてきますと、学科の先

生方はかなり専門性に重点をおいて、専門学科のスペシャリストを養成しようと、かなり力を入れるわけです。学生たちも、自分たちは何々の専門を専攻したというかたちでのアイデンティフィケーションをしているわけです。

ただ、実はこれも現在改革の途上にあることでして、本学でも「共通科目検討委員会」が現在進められており、2006年度から新しいカリキュラムに移行しようとしています。このときの考え方は、専門科目と共通科目の垣根をできるだけはずしていき、教員を流動的に両方に携わるようなスタイルにできないだろうか、と考えています。現在アウトラインが決まって、これから具体的な科目編成の方に入っていくことになっています。全面的に「教養」という概念を前面に打ち出しながら、再編をしていこうと考えています。リベラル・アーツ型の理念をもう少し明確に入れ込んでいこうという方向です。これも、学科段階ではいろいろとバトルが起こるかもしれませんが（笑）。

光本 再編のきっかけ、動機となったのは、先ほどいわれました「キリスト教教育のあり方検討会」が学内での全体のミッションとか教育体制の検討をしていることと連動して出てきたのでしょうか。

米本 その辺は、必ずしもそうはいえないのです。

共通科目のこれまでの流れの中で、小さな齟齬といえますか、小さなつまづきみたいなものがだんだん重なっていったって、どうも考え直さないといけないのではないかということになりました。先ほどのキリスト教の問題にしましても、いくつかの不具合というか、機能不全みたいなものが起こってきて、どうも考え直さないといけない。

こういうことが、いま、時期的にたまたま重なっていて、一方では全国的な動きの中での大学改革と連動して、かつ大学改革がめざしている目標とうまくマッチしているんです。ミッションを見直すとか、共通科目を見直すとか、それと専門科目との関係をどうしていくか。それはある意味で、大学改革がめざしているところでもある。タイミング的にうまくあっているといえると思います。

姉崎 国立大学は教養部をこの間廃止をして、北大は前から分属制になっていたのですが、多くの大学では教養教官を各学部にもう一回再配属するというかたちで、あるいは、教養部を改組して新しい学部をつくるということが行われたのですが、私学でも同じようなことが動いていますね。昨年、北海学園

をうかがったときに、一般教育の担当の先生を何年かかけてですけれども、それぞれ専門学部へ所属させるというかたち、教育責任としては一定程度残すけれども、所属としては、専門学部へ属するというかたちをやられているんですが、北星の場合は前からそうなっているのでしょうか。それとも、独立したかたちでやっているのでしょうか。

米本 教養部はないのです。教育科目担当の先生方は全部、学部所属です。ですから学部の教授会の決定過程に参加するわけです。

姉崎 設立された当初からそのように。

米本 そうです。そういう意味ではいわゆる教養部対専門部みたいな、そういう二分されたものはなかった。しかし、くさび型になっていますから、一応科目担当も分かれておりますので、ですから共通科目の先生という意識と専門の先生という意識の違いはどこかにあったんだろうと思います。

資格取得

米本 専門教育の中に入ってくる資格取得のための教育課程はどうなるのかということ、基本的には各学科・学部の卒業要件 132 単位前後の科目の外に、資格科目を設定して、プラスアルファとしてとるのが基本です。しかし、例えば社会福祉ですと、社会福祉学部の共通科目があって、社会福祉学部共通科目には資格科目が相当入り込んでいます。だから、卒業に向けた 132 単位を順次とっていくと、そのうちの何割かは資格に対応する科目になっていく仕組みになっています。

教職につきましても、132 単位の外に置いてあって、一部が卒業単位に少し重なりながら、資格科目が外に出ていることになります。社会教育主事も同じようになっています。

社会福祉士だけではなく、精神保健福祉士という別な資格もあります。ですから、社会福祉士と精神保健福祉士の両方をとることもできます。最も欲張る人は社会福祉士と精神保健福祉士と教職と社会教育主事を全部とる人もいないわけではない。卒業単位が 200 単位とかね（笑）。社会福祉士と精神保健福祉士をとるとか、社会福祉士と教職をとるとか、二つとる方は結構います。

佐野 社会福祉学部の学生には、全員、任用資格の「5 点セット」といわれる社会福祉主事とか児童福祉士とか、そこを卒業した後、社会福祉関係施設に勤めることができる任用資格が与えられます。

米本 私学というのは、資格がらみというものが一つの売りになっています。しかし、両立調和がどうなるかというところ、そこはなかなか難しさがあります。資格科目というのは科目数と単位数からするとけっこう負担ですから。それが自分の卒業までの4年間に相当なゆがみをもたらしていることもあるかもしれません。また、一方で資格を取らないことにもなかなか踏み切れない。学生も悩むところではないでしょうか。

光本 いま「5点セット」といわれたのは、『大学案内』の70頁に任用資格がいくつか書いてあるのですが、これらのことですか？

佐野 そうです。社会福祉主事・児童指導員・児童福祉司・身体障害者福祉司・知的障害者福祉司。ここまでは通常われわれが「5点セット」と呼んでいるものです。

米本 それがいわゆる肩書きとしてあるということではなくて、それを必要とする職務に就くときに、それは備えているものとみなすということです。

入学者の出身地

米本 北星学園大学は大変ローカルな大学でありまして、97%が道内出身者なんです。

道内でも、だまって放置していますと、いわゆる偏差値では、結局は札幌もしくはその周辺に偏っていくんです。けれども、北星は私学ですから必ず推薦枠があって、推薦枠の中に指定校推薦があります。指定校推薦のときに、例えば社会福祉学部などは、結構ローカルなところ、いわゆる地域の進学校といわれている部分に指定校推薦を依頼して、できるだけ全道のエリアをカバーしようと考えています。そういう配慮はいまの指定校推薦制度の中にはあります。

もう一つの一般受験を考えますと、次第に札幌近郊の進学校にだんだんと集約されはじめるということがあって、地方からなかなか入りにくくなっているという実態になっています。ますますローカルな中のローカルになりつつあります。

光本 地方出身者を積極的に受け入れようというのは、どういう考えからなさっているのですか？

米本 それは、地域というものをどう考えるかと、自分たちの大学のエリアをどう考えるかということと関連しています。札幌市は札幌市だけでたくさん選択肢があるわけです。地方の拠点になっているところときちんとルートをつくっておくことが重要な

のではないかと、また、単純に札幌市に集まるだけではなくて、きちんとIターンとかUターンとかいうかたちで仕事にかえていくような人材、特に福祉などはそうですが、そういうところはルートとしてつくっておく必要があるのではないかと、という意識はあります。

姉崎 学園には系列で高校とかありますね。附属学校から一定の枠で入ってくることはありますか？

米本 あります。いわゆる学園内推薦と呼ばれているものです。北星の場合は高校が三つ、附属高校と、女子高校と、余市高校とありますので、それぞれに推薦枠を出しています。

推薦でおもしろいのは、一時、キリスト教学校同盟推薦というのがありまして、キリスト教主義学校の高校の同盟があるのですが、そこには京都とか九州からも推薦枠があつて、来たことがあるんです。しかし、最近はあらゆる地域がローカルになってきていますので、そういうところからの推薦がだんだんなくなってきています。いないところへ募集しても仕方がないので切りはじめていて、先ほどいいましたように、ローカルになっています。

社会福祉学部卒業生の進路

米本 ご存じのように、社会福祉学部には、福祉心理学科・福祉計画学科・福祉臨床学科の3学科があります。ねらいとしては、福祉臨床学科はソーシャルワーカー養成ということを謳っていますし、福祉計画学科は中でも比較的、地域とか行政とかをターゲットにしています。それから、福祉心理は多様性があるのですが、一般企業です。このように学科によって就職先に多少の特色がありまして、ソーシャルワーカー養成を謳っている福祉臨床学科はいわゆる現場に出る割合が高く、卒業生の半分は現場に出ています。その次に計画学科が現場に出る割合が高いということです。心理の場合には一般企業に就職する割合が高くなっています。

それから、福祉心理の場合には、大学院に行きますと、臨床心理につながるができますので、そういう意味で大学院進学率は3学科の中で一番高いといえます。

現場の中でいま一番就職の分野として高いのは、実は医療関係なんです。医療ソーシャルワーカーになる割合が高い。あとは高齢者領域とか障害者領域とか、福祉の現場ということになります。



佐野 和真 氏

社会人学生

米本 社会人学生に門戸を開放するに至った経緯・現状とことがらについてですが、北星学園では、社会人特別入試を1980年、23年前にはじめました。北海道で一番古かったはずです。

社会人特別入試ですから、一般入試のような何科目受験というのではないわけです。当時は論文と英語です。英語は辞書をもってよろしいというものです。それから面接です。

20数年前ですが、大学は18歳人口のみを相手にしているのかということがありました。今流にいうと、「開かれた大学」とか、生涯学習・生涯教育、そういう意図がありました。

また、とりわけ社会福祉の方では、当時の医療看護系のほとんどが3年制の学制の学校を卒業の専門職だった。大卒資格ではないわけです。そういう大卒資格ではない人々が実は大卒資格を望むということがかなりの数字であるんです。そういう需要がありました。看護師、理学療法士、作業療法士といった人たちです。

三年制の専門職なのですが、大学卒、大学の勉強をしてみたい、それから、医療系で医療・福祉・看護系でやっている人たちの中に、もう一つ、福祉領域の勉強がなければ、自分たちの仕事をする上で偏っているのではないかという意識がありました。そういうことがあって、社会福祉学部で社会人入試をはじめたわけです。

社会人というのは、18歳で入ってくる学生たちから見るとはるかに大先輩ですし、また力をもっています。社会人的なパワーというのは、あるわけで、そういうのでひっぱっているわけです。そういうわけで社会人の力を期待しましたが、かなり成功したと思います。そして卒業のときにトップテンの5、6

人は社会人がさらっていきました。

保健医療系は四年制大学化してまいりましたし、それまで三年制専門学校を卒業した人たちも、だいたい大学に入るのが終わったという感じがします。そういうわけで、残念ながら最近は激減しています。**姉崎** 入試結果を見ますと、募集人員に対して志願者が少ないのは、いまおっしゃったようなことですか。

米本 そうです。この5年くらいでしょうか、社会人の減り方というのは。倍率が2倍とか相当の需要があったんですが、いまはもう満たせません。

光本 それは、他大学にもこういうのができてきて、そちらにも行くようになったということでしょうか？

米本 そういうこともあると思います。社会人特別入試がかなりの大学にできて門戸が広がりました。

佐野 実際に職業をもっていて、さらに通常の授業となりますと、かなり時間割上の工夫をしなければいけません。大学院では院生ではリカレントを入れていますけれど、昼夜開講制だとか、もしくは土日の授業をやってあげるとか、そういう対応をしないといけないと、なかなか社会人の学生は普通の一般の学生と同じような時間割では難しいというのがあります。ただ、そういう対応をしていくと、教職員の人事管理上の問題とか、大学施設管理の問題とか、またいろんな問題が出てくるんです。

姉崎 社会人がむしろ大学院の方へシフトしてきているということはないですか。

米本 福祉学専攻におきましては、入る人の半分はリカレントですから、そのために昼夜開講で夜間、土曜日の他に集中講義で単位を取れるようになっていきます。

地域の実習や就職先の開拓

米本 社会福祉の実習関係につきましては、卒業生が現場に入って、その中で比較的中堅どころや上層部になってきたということがあって、そういう人たちをつてにしながら実習先を開拓していくというのが常套手段ですね。

このごろは、介護や福祉関係では非常に競争が激しくなっていて、かなりの大学で、社会福祉士の受験資格のための課程をもっておりますから、実習先を確保するのはなかなか大変だということは確かです。ただ、北星はこれまでの老舗ですので、比較的確保できています。

佐野 就職については、基本的には就職課がありますので、そこの担当職員が施設など訪問したりして開拓します。社会福祉施設については、福祉実習とのかかわりがありますので、社会福祉学部の教員とのつながりの方がメインにきて、就職課はどちらかといえば一般企業の方の開拓を中心にしているのが現状です。ただ、ある程度は就職課がフォローしています。

米本 北星学園大学は就職率からいうと他大学と変わりはないですが、学生の評価などを見ますと、就職支援が弱いのではないかという意見がないわけではありません。

光本 資格を生かして入っていくところには比較的強いのですが、一般企業についてはほとんどサポートがないということでしょうか。

米本 全般的にです。

姉崎 それは何か理念があってということですか。就職は自分たちで探すものとか。

米本 そんなことはないのです。就職は個人の問題だとか、そういう理念があるわけではないのですが、だからといって、大学は就職の世話を最後まできちんとやるのだ、やらなければという積極的な位置づけにはまだいっていないと思います。そういうところを今後どうするかが大学全体として課題だと思います。

就職支援につながるようなカリキュラムの工夫とか必要ではないかという議論もあるのですが、それに踏み切れるかどうか、検討をはじめていますところ です。

大学に対する評価

米本 大学に対する評価は分からないです（笑）。

佐野 卒業生からぜひ聞きたいですね。

米本 学生による授業評価を2年間に一度やっています。今年度が実施年です。この間前期分が終わって、後期分はこれからです。いま、集計をしているところです。総合評価で5・4・3・2・1を見ると、全平均が3・95でした。これが高いか低いかわかりませんが、内部の学生が評価するときに総合評価として4点に近かったわけです。この結果はなかなか面白いです。報告書ができたらいつでも見ることができます。

姉崎 『自己点検・評価報告書』はこれまで何度か出していますか。

米本 それはつくっておりますから要請があれば出

すことになっております。かなり分厚いものですし、かなり綿密にやっているといます。ある大学の方に、「これはすごい」といわれました。

佐野 今度、第三者評価が7年に1度義務づけられましたので。

米本 大学基準協会の相互評価を受けて、それを次年度に報告書しなければならないのですけれども、そのときにいわゆる勧告は一つもなかったです。意見書みたいなのはいくつかあって、それについて対応しようということで、およそ、クリアできるのではないかと思います。

光本 基準協会の件がそうですが、北星は比較的、積極的に評価を受けているように見受けるのですが、その辺は何かお考えがあってやっているのでしょうか？

米本 隠す必要はない（笑）。

佐野 基準協会に加入したのは、道内でかなり先の方ですね。

姉崎 第三者評価以外に、大学の有識者懇談会などがありますが、そういうものは何か公開されたものがありますか。

米本 いいえ、組織としてはありません。本当に間接的なものですが、同窓会とか後援会の中で、卒業生や現在の学生の親との関連があって、アンケートなどが出てきますので、そこから大学に対する評価や改善を要求するものが出てくることはあります。

姉崎 いろんな大学で、ホームカミングデーとか設けて卒業生を迎えたり、現役の学生と交流したりしていますが、そういうことは何かやってらっしゃるのですか。

米本 大学の組織としてはありません。ただ、学部学科によっては学内学会をもっていて、学内学会の中で卒業生を含む会員に対しては年に1回の総会などの集まりをお願いすることはあります。

姉崎 最近、入学後になかなかじめない学生をどうケアするかが課題になってきていますね。道内出身者が97%ですが、地方から来ている人が下宿したり、アパートで暮らしたりしたときに、そういう悩みに対する支援のしくみとか部局とかそういうものはありますか。

米本 学生部の中に学生支援委員会があり、その中に学生相談室運営委員会というのがあって、学生相談室がここに 있습니다。学生相談室はまだ非常勤ではありますが、心理相談員、カウンセラーが常駐し

ています。そこが相談の窓口として中心になっています。

姉崎 ドロップアウト、途中中退する学生はそれほど多くありませんか。

米本 精神的に不安定な学生は少しずつ増えているのではないかと思います。ドロップアウトする学生が多いのか少ないのかというと、基準が分かりません。

佐野 いわゆる中途退学率ですよ。予算的には5%とっていますが、5%になることはありません。

米本 学生相談員は現在、非常勤職員ですが、将来的には専任化したいという動きが学生部にはあるようです。

地域社会との接点

米本 一口に地域といっても、大学のあるすぐそばの地域、札幌圏という地域、道内というところもあると思います。大学としては北海道がメインエリアであると考えています。そこには後援会組織が多くあります。札幌の他に、函館・室蘭・旭川・北見・網走・釧路・帯広、それから東京でも後援会の会合を毎年1回開いています。

それから大学の同窓会組織があって、旭川・北見・帯広・千歳・函館・釧路、それから東京に同窓会の支部がそれぞれあって、先ほどの後援会組織の動きとかなり連動できるようなかたちで各地域にそういう拠点をもっていて、支部活動を行っています。先ほどの推薦の指定校において地方の枠を設けているのも、道内エリアを視野に入れているということですよ。

札幌圏を考えますと二つありまして、一つは、札幌圏の大学の図書館の相互利用というかたちで、図書館コンソーシアムみたいなものがあります。12大学（旭川大・札幌大・札幌医大・札幌学院大・東京農業大・藤女子大・北星学園大・北海学園大・北海道浅井学園大・北海道医療大・北海道工業大・酪農学園大）の図書館が相互利用の便宜を図ろうということで、学生が自分の身分証明書をもっていけば利用できるようになっています。

もう一つは単位互換ということで、これは2年前にスタートしました。当初は国道12号線沿いの酪農学園大学の呼びかけが非常に強くて、今度新たに、札幌大と国際大と北海道東海大が入りまして、短大も含めて11になりまして、新たな調印式をやるということで、12月6日に行います。このようなか

たちで、単位互換、そして大学図書館をふくめて、札幌圏の中を固めていこうという動きがあります。

もう少し狭い、大学近辺でという意味での地域となりますと、特に熱心にやっているということはないのですが、大学祭などは、地域の小学校や高齢者団体を含めて地域3世代交流ということで、大学からプログラムに入れ込んでいます。それから、本学の図書館は、朝の8時45分より夜10時まで、日曜開館は12時から午後6時までやっています。地元の方たちにもきちんと登録さえしていただければ、図書館利用はできるというかたちです。

それから、大学間だけではなくて、高大連携ということだと、付属校との高大連携は当然ですが、これも次年度から本格的に始まるわけですが、通常の一般の高校向けにかなり斬新な五つ六つのプログラムをセットにした高大連携のプロジェクトを立ち上げまして、全道の高校にいっせいに、北星学園大学がこういう高大連携のプログラムをもっておりますと働きかけていこうと考えています。新聞にも出ておりましたが、清田高校との連携もすでにはじまっています。双方にとって、相当の好影響があります。あれに刺激されているんな方向から打診が来ています。

そういうかたちで、この近辺の住民の方々、札幌圏の考え方、そして、北海道という考え方で努力はしています。それがどういう評価になっているかというと、これからの問題ですが。

生涯学習プログラム

米本 次に公開講座生涯学習プログラムなどの教育事業ですが、これは従来、北星学園大学は、課外講座というかたちで、大学の正規科目以外に有料もしくは無料で、大学生、それから地域の方々にも受講できるような、例えば英語講座、英会話講座などをやってきました。

昨年度から短期大学がこちらの方へ来まして、短期大学部として一体になりましたけれども、短期大学部は向こうの四条校舎のときに、ナイトプログラムというかたちで市民講座をもっていたんです。市民向け講座と大学の課外講座が合体したかたちで、エクステンションセンターを立ち上げて、エクステンションセンターが市民公開講座をプログラムとしては相当の数を用意しています。その市民向けの講座の中に高校生が入ってもいいようなものには、高校生にも開放しています。カルチャーセンターほど

ではありませんが、講座数としては相当なものがあります。

姉崎 他の大学のようにサテライト展開をするとか、そういう考えはありませんか。

米本 四条校舎でやってきた短大分の、そのときの受講生の地域性と、こちらへ来てからとでは、同じ短大のナイトプログラムでも受講生は全然変わりました。こちらの受講生はエリアの中だけです。地の利というものはけっこう反映します。エクステンションセンターの運営する側からすると、何とかサテライトが欲しいところです。

単純にエクステンションセンターのためのサテライトではなくて、サテライトをつくる以上は、もっと広範な、例えば大学院教育にどう使っていくのかとか、そういうことも含めて総合的に考えなければならぬのではないかということで、サテライトの構想をきちんと立てようという議論をしています。そういう意味では全く No ではありません。

産学連携

姉崎 地域連携の点では、学部構成もありますが、近年特に、産学連携とか産官学連携という言い方がありますが、人文社会系の場合ですとその辺は難しいと思いますが、地域の産業や商工業と大学の知的リソースを結びつけてやろうという構想はありませんか。

米本 いまのところ各教員が個人的な考え方でやっているところがあります。それとは別に、大学の組織として考えるときに問題があるのは、実は研究所構想が先で、研究所ができるとそれとのかかわりで産官学の枠組みが構想ができるのではないかと考えています。現在の体制の中では即、産官学とまではなかなか行かないので、研究システムの構想の中で位置づけるべき問題だろうと考えています。

一貫教育

高橋 北星学園は中学からありますが、一連の教育の中でめざすものは何でしょうか。

米本 これは大学構想というより学園構想になるわけです。この前、道新の全面広告で北星学園の女子中高一貫教育という話が出ていたわけですが、女子中高の六年制一貫教育というものを、ようやく全面的に打ち出したのです。それは女子中高の方の問題ですが、学園の中には、中・高・大・大学院という4段階があるわけです。そこにおける一貫教育が何

かということは非常に重要な問題です。

これまでは各校の独立性が強くて、それぞれ自分たちのユニークさをどれくらいつくっていくかということで動いてきました。しかし、私学の今後のあり方を考えると、学園全体として中・高・大・院の一貫性を強みにしていかなければいけないということがあります。教員の頭の中にはそういう意識はありますが、まだ具体的に何かということではありません。ただし、附属高校との関係でいうと、附属高と大学はかなり一本化されてきていますので、そういう意味では高・大・院の三つの層はかなりつながってくると思います。

佐野 英語とか、新しく始まった高校の情報の科目とか、そういうかたちの教員同士の合同研究会などを昨年くらいからはじめています。

米本 今度は日本語力の強化についてやっています。高校の終了時点がきちんと大学の出発点になれるように、そのようなつながりをつけていこうと思ってやっています。

光本 附属校出身者とその他一般入試で入ってくる人たちとの間に違いはありますか。

米本 結果が見えるまで、まだ5〜6年かかりそうです。

姉崎 女子教育から出発した学園の場合は、地域社会の中でどういう女性を育てていくかということがあったかと思いますが、大学は男女共学ですね。そのあたりの違いなどがありますか。

米本 「北星学園」というと、「あっ、女子校ですね」というのがまだないわけじゃないんです。「いえ、男女共学です」というと、「えっ、そうですか」と驚かれたりして、こちらが驚いたりするのですが（笑）、確かにギャップはあったのだらうと思います。この大学キャンパス自体は、女子教育が要素としてあるかということ、それはないと思います。

短期大学部も男女共学になりました。男子学生は4名ですが（笑）。全体を見ますと女性の方が多いですね。

佐野 女子学生が55%です。

光本 道内の私学ですと、短大部を廃止するような動きが見られたりしますが、北星の場合はキャンパスは移りましたが、短期大学部としてやっていくとされたわけですが、今後どういうふうになっていくのでしょうか。

米本 英文学科と生活創造学科がありますが、それぞれに大学への編入の道がかなり強力にあります。

短大の方から4大につながっていくルートはあるわけですね。そうすると、短大の集客力はまだあるのではないかと見ています。もちろん規模は縮小しているわけですが、短大部になってから、若干上向いたのです。

佐野 ただ、入学定員はかなり抑えました。

米本 そうですね。倍率的には上がったわけです。そこから見ていくと、もちろん未来永劫ではありませんが、当分の間は短大部をもって大丈夫なのではないかという見込みはあります。

佐野 大学の入学定員を大学の新学科の方に定員を動かして改組しているんです。

米本 逆に他のところの短大部の閉鎖などが北星の方の編入学生の減少とも関係しているんです。

国際交流

姉崎 一方で国際交流に力を入れていらっしゃるって、交換留学生在相当出るとかかっています。道内であっても、教員スタッフも含めて比較的国際性が強いと思うのですが、そのあたりについて。

米本 確かに北星の売りの一つに国際性があるって、例えば、交換留学提携大学への派遣・受入学生数では、多いときで30くらい、少ないときは10数名です。

これは学生にとってみても非常にインセンティブになるプログラムでありまして、大学としても当然これを推進するわけですが、そのためには、提携大学に留学した場合には卒業にできる限り支障のないように単位を認めて便宜を図る。それから、できるだけお金のかからないようにやっています。

さらに、国際交流については抜本的に見直そうと考えています。われわれのこれまでのやり方はアメリカに偏りすぎていたのではないだろうかという議論があって、アジア・オセアニアを視野に入れてこうと。それから、ゆくゆくはヨーロッパへも視野を広げていかなければいけないのではないだろうか、ということです。

アジア・オセアニア圏へ視野を広げていきますと、いわゆる経済格差が大きいところがありますので、こちらの方で相当の受け入れ準備、メニューを用意しなければいけないだろうということで、そのようなハード的な面を含めて着手しようとしています。うまくいけば、次年度からハードの側面もソフトの側面も検討が始まります。

その一方でなかなか外国との交換留学は、お互い

に、出す方も受ける側もいろいろな思いもかけない問題を抱えていて、リスクがあります。

佐野 この間のSARS問題もそうです。

姉崎 送り先もアメリカを中心にしてあって、こちらの受け入れる場合もアメリカからの学生が多いですか。

米本 はい。もう一つは中国です。それと最近韓国と台湾が新たに入ってきました。

非常に面白い動きで、最初は招待なのです。どうぞ来てください、全部こちらでもちますから、と。そして返訪します。それが縁で今度は提携しましょうと。そういうかたちで動いていきます。

大学生協

上田敦 就職や資格取得に関連して、大学生協との連携などはあるのでしょうか。

佐野 大学生協でも、学生向けの資格講座などを単独でやっていますが、先ほどのエクステンションセンターを立ち上げた中で、大学生協とタイアップした資格講座をエクステンションセンターの中に組み込んで、学生向けに始めました。

米本 それはかなりのメニューがあります。

佐野 社会保険労務士や行政書士資格、そういった国家試験向けの半年かかっている講座とかです。

米本 それから英語力テストです。TOEFLとかTOEICとか英検があります。

佐野 大学生協だけではなく、公務員受験予備校のようなところとも独自でタイアップをして、そちらの本校の方で受験すると何十万もかかるところを、うちで受けると数万円で済むとか、そういうことをやっています。

キリスト教教育

染木 キリスト教の行事が地域の方々に開放されていることはありますか。

佐野 日常の礼拝そのものは学生向けですが、日曜日だけキャンパス内での合宿集会所の中でやる礼拝には、有志で地域の方も参加します。

それ以外に、宗教部が主催するチャペルコンサートを年に何回かやっています。それはチャペルの中で礼響の土田英順さんのリサイタルをお願いするか、そういう活動を年に何回かやっています。ここには、地域の方にも広く参加していただいています。

米本 ここの東急ストアの入り口のところに、向こうのご好意で北星学園大学用の掲示板が用意されて

いるのです。どうぞ使ってくださいとかたちでできたのです。そこに北星ではこういう行事・講座がありますと、それを見た場合は来てもかまわないわけです。

それから、ここは門があるようで、ないです。ここは通勤路なのです。ここを通過して通勤している方は多い。そこで、ずっと校舎へ入ってきて、何をやってようが分からない。

光本 一般の方が学内を通り抜けるんですか。

佐野 地下鉄の駅に近道なのです。

米本 これが一番貢献しているんじゃないでしょうか(笑)。そういう意味では、この辺の出入りは自由です。

染木 キリスト教の理念を、布教活動とまではいなくても、そういったことを地域に広めるといったことはありますか。

米本 日曜日の礼拝は地域の方は参加が自由ですから、それはそれで一つの活動です。それ以外に、布教活動とはいわないと思いますけれども、何か宗教活動をしているかという、特になんとも思います。

エクステンションセンター

石山 エクステンションセンターのスタッフは専任でしょうか。

米本 併任です。事務局の中にエクステンションセンター係があって、その上にエクステンションセンター運営委員会があって、教員によって運営されています。そこに係を含めた事務体制がサポートします。

札幌学院は校舎内にかなり大きいエクステンションセンターがありますね。あれほどのものではありません。

高大連携

伊藤 高大連携の話がありましたが、清田高校とは具体的にどういったかたちでやっているんですか。

米本 高校との連携については、この1年間で三つありました。一つは、エクステンションセンターの市民向けの講座に時間帯があって、関心があれば、高校生も入ってくださいというものです。そのときは夜間に「民話の世界」という公開講座の中に高校生が1人入ってきました。

二つ目が、エクステンションセンターが高校生向けの英検準2級と2級の受験講座を開設しました。



そこに高校生が入ってきて、清田高校が8割方です。

三つ目は、授業体験プログラムという言い方をしていますが、大学で1年生対象の科目で、専任の教員がもっているということと、外部に公開してもよろしいとなったときに、その時間帯に入門編の科目を高校生が受けても結構ですよ、というかたちでオープンにしたわけです。その授業体験プログラムには清田高校の生徒が10名くらい来ました。

佐野 試しの生徒さんは抜いて、前期は10名のうち7名が清田高校です。

米本 後期はもう少し増えているんですね。

佐野 はい。

米本 そういうかたちで、8割くらいに修了証書を出すことになっています。

それから、清田高校の方で、全部の1年生を北星学園大学で1日、オープンキャンパスをやってほしいということになりまして、夏休み中の1日、朝9時から、360名の1年生に最初オリエンテーションを行なったあとで、2時半まで二つの模擬授業を受けることができる、それからキャンパス見学と、食堂の体験と、先輩たちとの話し合いをやりました。

卒業生の先輩たちにキャンパス案内をしてもらったんです。これが生徒にものすごく評判がよかった。生徒が一番喜んでいたのはチャペルです。二番目が図書館、三番目は大学の生協食堂です(笑)。そして、4つ目が体育館のトレーニングルーム、フィットネスルームです。これがまたすごい反応がありました。大学のはでかい、とか(笑)。

そういうようなすごい反応があって、1年生ですから少し早すぎるのではないかと思ったのですが、向こうにいわせるとそうではないそうです。生徒に選択肢の幅を広げさせていくことをやらないと結局迷います。ある意味では入れるところに入ることになってしまう。行きたいところをつくっていくこ

とが重要なので、そういう意味で、刺激的でとてもよかったということでした。

伊藤 大学生と高校生が接点をもつというようなことはあるのですか？

米本 先ほどの例では清田高校の卒業生と1年生が接点をもったということですが、一般的に卒業生が出身校の高校生と接点をもつということはないです。

佐野 授業体験プログラムでは、普通の大学の授業に高校生が入っていますので、大学生と高校生がディスカッションをやっています。

米本 今後はその辺のところを拡大しよう、高大連携をきちんとやっていこうかなと思っています。

佐野 今年度は5科目しかオープンにできなかったのです。来年度はもう少し科目数を広げたいと思っています。

ちなみに高校生に一番人気のチャペルなんです、新郎・新婦のどちらかが本学の卒業生であれば、チャペルで結婚式を挙げることができます。ほとんど、毎週のように結婚式は行なわれています。格安で（笑）。

光本 その辺も高校生が評価されている（笑）。

米本 なかなかいいムードなんですよ。チャペルは。

受講動機と評価

星 先ほど教育課程のお話をしていただいたのですが、わりと生徒は早めにそれぞれの専門の授業を学びたがるということと、そういう授業を学ぶ中で、アイデンティティを形成していつているような感じがするとおっしゃっていたのですが、他の大学に進学した生徒に比べて、そのような専門性を最初から意識した生徒が北星に進学しているというような感じは受けますか。

米本 学部学科によって違います。

星 福祉とかは、やはりすごく…。

米本 はい、多いと思います。

それから、英文科もはっきりしています。英語をやりたいとか英語の力をつけたいとか、あるいは外国へ行ってみたいとか、そういうことも含めて英文科は志向性が高い。この前やった授業評価でも、英文学科の授業評価が一番高いんです。自分たちのやっていることが自分の関心に応じてくれるものであるということと、あれは力がついたことが見えやすいので、そういうのが相まって、授業評価がある程度高くなっているのではないかなと思います。

佐野 自己評価のときにその科目を選択した理由という設問がありまして、その中で一番多かったのは、英文学科と社会福祉は「シラバスを見てこの科目を選んだ」というのが多かったようです。かなりの学生は講義の中身の見比べをしているのだなと思いました。

米本 講義要綱を見て受講したという学生の授業評価は高いです。ちなみに、単位が取りやすいから取ったという学生は授業評価も低いです。

星 必修の教科でキリスト教のことを学んだり、キリスト教精神の制度化ということは今後考えているとおっしゃっていたのですが、学生の人格形成にこういったことが影響を与えている感じはありますか。

米本 簡単にいうと両方だと思います。必修ですから、強制されることによって非常にネガティブになってしまう学生と、それに触れることで世界が広がったという学生とがいます。クリスチャンになるとかならないとかではなくてです。

大学としてキリスト教主義だからということでは必修化していくと、逆にキリスト教に対する離反をつくってしまうかもしれないわけです。そういうことも含めて、どういうふうにするかを共通科目検討委員会の中で検討されているわけです。必修化することには独特の難しさがあります。

光本 時間もだいぶ経ちましたので、終わりたいと思います。

米本 学部の2年生・3年生からこういう研究的な話を大学院生と一緒に聞ける機会を設けるのはいいですね。